

あさ の きち じ ろう

## 浅野吉次郎

## 先んじて働き、職工に範を垂れる

## —ベニヤ合板の創始者—



浅野吉次郎(1859～1926)

銅像は名古屋から木材・合板博物館(東京)に移転

浅野吉次郎は1859(安政6)年、現在の名古屋市西区上島町で浅野文六(三代目浅野宇兵衛)の次男として生まれた。浅野家は170年前から尾張藩の御納戸役として桶、樽類の製造を業としていた。1878(明治11)年、20歳で家業の桶、樽製造業を継いだ。毎日、朝は職工に先んじて工場で働き、徒弟に範を垂れ、夕方、手先の見えなくなる頃に労務を終え、夜は帳簿の整理に当たるほど働いた。また、常に机の上に粗末なコンパス1個と曲尺、算盤を備えて、諸機械の発明、改良に没頭し、一度着想すれば、組立図、分解図をつくり、自ら鋸を引き、槌をふるってひとつひとつ発明した機械を完成させていった。

## ■セメント樽製造用機械の考案に腐心

浅野吉次郎は、桶、樽などの木工業のかたわら、自ら改良した水車による動力で精米業を営んでいた。こうした矢先、1886(明治19)年、熱田に愛知セメント会社が設立され、会社の依頼によりセメント樽の製造を始めた。このセメント樽製造のための各種木工機械の考案に腐心し、樽側挽き割り機械、蓋底挽回し機械、帯鋸盤などを発明した。また、それらの木工機械に

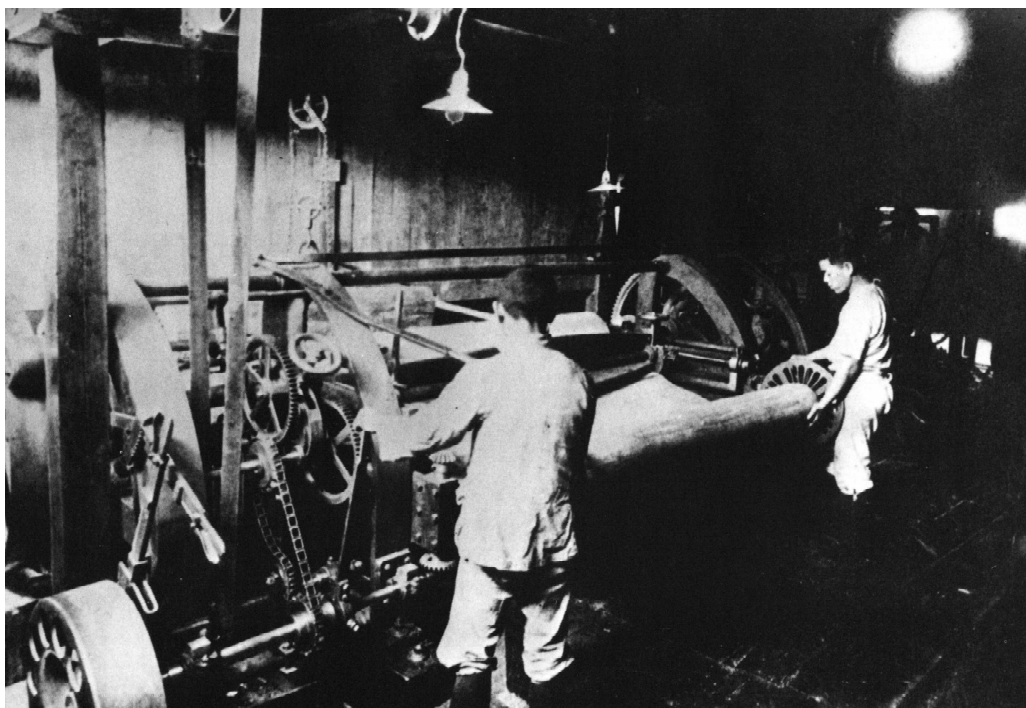
蒸気力を応用するなど、従来の桶屋から木材加工業へと事業を拡大させた。

## ■ロータリーレースの開発

浅野吉次郎と合板との出会いは、三井物産が1899(明治32)年頃、モミ材茶箱(チェスト)を浅野木工場にその製造を依頼したことであった。また、三井物産の茶箱の輸出を担当していた伏見万次郎より、海外の茶箱は合板(合わせ板)で出来ている、との知らせがあった。

ベニヤは木材からはぎ取った1枚の薄板を指し、そのベニヤを3枚以上貼り合わせたものが合板(プライウッド)である。浅野は、合板製造法の研究を積み重ねる中で、蒸気で蒸した木を剥いで薄板(ベニヤ)にする技術が要であることを知り、まず剥ぐ機械、すなわち鉋の発明に全力を傾けた。1907(明治40)年、在来の大鉋をローラーに取り付けただ単板丸剥機(後にロータリーレースと呼ばれる)を完成させ、丸太から薄板を剥ぐことに成功した。

浅野は、一本の木をロータリーレースにかけてベニアをつくり、そのベニアに膠をはけで塗り、接着させる方法で



合板を作り出した。後に膠をホルマリンによって処理する方法を発見し、安定した加工が出来るようになった。浅野は、丸剥機、ロール糊付け機、ローラー式乾燥機など開発し、その特許を取得して、普通板の3、4倍の耐久力のある合板製造技術を確認し、今日の合板産業の基礎を築いた。

(寺沢安正、石田正治)